

児童期の家庭での関わり合いが青年期の共感性に及ぼす影響

藤 村 あず奈

現代の日本の思春期・青年期の課題として、友人や恋人との人間関係の築き方や、コミュニケーション、いじめ等の問題行動への関心が高まっており、それらの問題を解決するために共感性の育成が重要視されている（文部科学省，2014）。共感性には生得的な基盤が想定されているが（Tomasello, 2009），生後の経験や学習で発達する社会文化的説明も可能である（Goldstein & Winner, 2012）。では具体的にどのような経験が共感性を促進させるのだろうか。本研究では、家庭での関わり合いと親の養育態度が共感性に影響を及ぼしていると仮定し、家庭での関わり合いと親の養育態度が共感性の発達にどのように寄与しているかについて探索的に検討した。

本研究では、大学生を対象に質問紙調査とweb調査を実施し、回答があった241名（男性92名；女性149名）を分析対象とした。家庭での関わり合いについては先行研究を参考に、学童期におけるお手伝い、本の読み聞かせ、保護者との食事や外出等の頻度を想起し回答を求めた。加えて、大学生が現在認識している親の養育態度については認知された親の養育態度尺度（龍・小山内，2013）を用い、共感性は多次元共感性尺度（鈴木・木野，2008）を用いて測定した。

因子分析の結果、共感性は5つの下位因子に分けられた（「被影響性」「共感的配慮」「想像性」「視点取得」「個人的苦痛」）。親の養育態度は3つの下位因子に分けられた（「受容的かかわり」「統制的かかわり」「責任回避のかかわり」）。各家庭での関わり合いの頻度と親の養育態度の各因子を独立変数、共感の各因子を従属変数とした重回帰分析を男女別に行った結果、男性の「養育者との朝食」が「想像性」に正の影響を及ぼしていた。また、男性の「風呂掃除」が「視点取得」に正の影響を、「共通の部屋の掃除」が「視点取得」に負の影響を及ぼしていた。一方で、女性の家庭での関わり合いが共感性に及ぼす影響を示す有意な説明変数は見受けられなかった。また「受容的かかわり」は男性の「共感的配慮」と「視点取得」に正の影響を及ぼし、「統制的かかわり」は女性の「個人的苦痛」に正の影響を及ぼしていた。そして「責任回避のかかわり」は女性の「共感的配慮」に負の影響を及ぼし、男女双方の「視点取得」に負の影響を及ぼしていた。

これらの結果から、女性にとって家庭での関わり合いは共感性を発達させる要因にはならないことが示唆された。一方、男性には家庭での関わり合いが共感性の認知的側面である「想像性」と「視点取得」に影響を及ぼしていたことから、共感性の認知的側面は経験によって高められる可能性と、男性の共感性は成長の過程で後天的に獲得されていく可能性が示唆された。